昭和46年8月1日発行（毎月1回1日発行）第20巻・第10号　昭和29年6月23日　日本国有鉄道特別扱承認雑誌第2836号　昭和30年3月24日第三種郵便物

航空ファン

THE KOKU-FAN

ワイドカラー
WIDE COLOUR

メッサーシュミット
Bf-109E

☆特集☆

'71

米対潜空母タイコンデロガ（CVS・14）の搭載機

艦橋から艦尾を望む。手前にSH-3Dシーキング ヘリコプタ，後方にE-1Bトレーサーと S-2Eトラッカーが見える。

去る5月中旬に横須賀に寄航、1週間ほど滞在した米対潜空母タイコンデロガの搭載機。同艦は第3対潜空母部隊の旗艦として東南アジア方面で作戦していたもの。第53と第59対潜空母航空群（CVSG-53, -59）の"海上基地"として、S-2Eトラッカー対潜機を装備した二つの飛行隊とSH-3Dシーキング対潜ヘリの二つの飛行隊、それにE-1B早期警戒機の分遣隊を搭載している。

前ページ上は分遣隊のE-1B、同下は第33対潜飛行隊（VS-33）所属のS-2E。尾翼にスクリュー・バードとつるぎのマークを付けている。上は第38対潜飛行隊（VS-38）のS-2Eで、尾翼のマークはかに。下は第4対潜ヘリコプタ飛行隊（HS-4）のSH-3D。同機はアポロ宇宙船（第8、10、11、12、13号）の司令船回収にも出動しており、機首にそのマークを画いている。

三軍記念日の展示機

5月16日に公開された岩国基地の三軍記念日地上展示機。上は第15司令部整備飛行隊（H&MS-15）のTA-4Fスカイホーク，下は第4哨戒飛行隊（VP-4）所属のP-3Bオライオン。ともにただいま岩国基地に駐留中の機体。

上は5月15、16の両日、厚木基地に展示されたCH-53Dシースタリオン　ヘリコプタ。海兵隊第462重ヘリコプタ飛行隊（HMH-462）の所属機。下は岩国基地に展示された海上自衛隊のPS-1飛行艇の1号機。

横田を訪れたF-105D

横田基地に立ち寄ったF-105Dサンダーチーフ。嘉手納基地に駐留している第18戦術戦闘航空団（18 TFW）第12戦術戦闘飛行隊（12 TFS）の所属

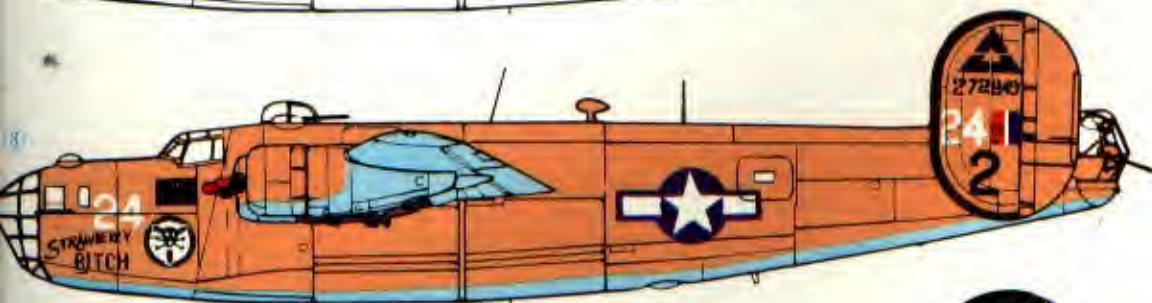
グループ活動でウデをみがこう！
この作品は東京のウェスタンプラモサークル（WPC）のみなさんがテーマを選んで作ったバリエーション集です
★BIGな男の
REVELL
1/32
SERIES
モデラーのユニホーム
レベルTシャツ
レベル総代理店
郡是産業㈱物資部
東京都中央区日本橋江戸橋２－６
TEL. 272－4771代
Revell

岩国基地のAD-6スカイレイダー

朝鮮動乱から1955年頃にかけて岩国基地に駐留していた海兵隊第121攻撃飛行隊（VMA-121）のスカイレイダー。写真の機体はAD-6（A-1H）で，1952年以降にこの部隊の装備機となっている。

CONSOLIDATED *B-24D LIBERATOR*

① PLANE FIGURE OF ④ AIRCRAFT.
② B-24D IN SEA-SEARCH CAMOUFLAGE.
③ B-24D, 512ND SQN., 376TH B.G.,9TH A.F.
④ B-24D, 93RD B.G., 8TH A.F.

① 図④の平面塗装
② B-24D、洋上哨戒用のカムフラージュ
③ B-24D、第9空軍第376爆撃大隊第512中隊所属機
④ B-24D、第8空軍第93爆撃大隊の所属機

コンソリデーテッド　B-24D　リベレーター

CONSOLIDATED B-24D LIBERATOR

第２次大戦中のアメリカ爆撃機中，最も多く量産され，実に18,181機の多くが生産されているのが，このB-24で連合国側の主力爆撃機として各戦線で活躍，哨戒，偵察，輸送機としても使用された。特に対日戦用として大活躍をしたが，D型はB-24最初の本格的な量産型で，太平洋戦争の初期から中期にかけて使用され，J型はB-24の中でもっとも多く生産された型である。

☆キット紹介☆

レベルから発売されているB-24のキットにはスケールが２種あって，デラックス版の1/72キットと1/120スケールのJ型がある。また1/72スケール・キットには海軍型のPB4Y-1のキットもあり，合計３種のうちから好みの型をえらべるのも楽しい。1/72スケールのD型はオール可動式のモデルで下面銃座が回転引込み式，フラップが開き，脚はオール引込み式という，なかなか凝った機構をもつ優秀キットである。

☆塗装について☆

アメリカの爆撃機にはアッと驚くハレンチ・マークのついた機体が多く，特にB-24はスゴク派手なメイキャップが多いのも塗装の楽しみのひとつである。

図①は図④の平面塗装で，機体の上面がオリーブ⑫，下面はニュートラルグレー⑬の塗装，主翼上面右翼の国籍マーク位置に相当する部分に白丸に黒のBが記入された垂直尾翼と同じマークがついていて，主翼下面は右翼下面に国籍マークがあるだけとなっている。

図②　機体上面がオリーブドラブ⑫，下面はホワイト①＋㉚。機首側面にはベットに美人のハレンチ・マークつき。スピナはシルバー⑧でプロペラ・ブレードは黒つや消し㉝である。

図③　機体上面がサンデイブラウン⑲，下はアズールブルー（ライトブルー⑳＋スカイブルー㉞＋レッド③少量混色），機首の24の数字と文字のフチは白，STRAWBERRY　BITCHの文字とマークは黒で，スピナはレッド③＋㉚である。

図④　図①の説明と同ようにオリーブドラブとニュートラルグレーの塗装，機首の出撃スコアと文字はイエロー④＋㉚，方向舵と翼上面は部分的にダークグリーン（日本機色⑯を応用）の迷彩である。国籍マークは特殊タイプでライトブルーの地色となっている。スピナは黒つや消し。

（K. Hashimoto）

No other American bomber during World War II was built in greater numbers than the B-24. The total number of B-24s produced reached an all-time high of 18,181. This aircraft was the primary bomber of the Allied Forces and was also employed as a scout and patrol aircraft, as well as a transport. Although it played an active part in many theaters, it is especially well known for its activities over Japan.

The B-24D was the first mass production model of the series and was used in the early and middle stages of the Pacific War. The B-24J was the most produced model in this series.

KIT:

Three different B-24 kits are now on sale from Revell. Model kit fans can enjoy any one of, or all, of them-the 1/72 D series kit, the 1/120 J series or the Navy PB4 Y-1 kit. Comparing the three kits will add greatly to the pleasure of building the different model B-24s. The 1/72 D kit is so elaborate that all its parts are moveable. The gun turrets can be revolved and drawn in. The flaps can be opened and the landing gear is retractable.

PAINTING:

Your modeling pleasure will be doubled when you see the B-24's intricate painting. This occurs often with American bombers. The B-24 painting scheme is especially pleasant because of its showy make-up.

Fig. 1. Similar to the plane in Fig. 4, the upper surfaces are Revell Color (RC) 12, olive drab. The lower surfaces are RC-13, neutral gray. A black "B" within a white circle is on the upper right wing. On the tail is the same mark. The insignia is on the lower right wing only.

Fig. 2. The upper surfaces of the plane are RC-12, olive drab, while the lower surfaces are RC-1 and RC-30, white. On the side of the fuselage is painted a "beauty" lying in bed. The propeller hubs are RC-8, silver, and the blades are RC-33, non-glare black.

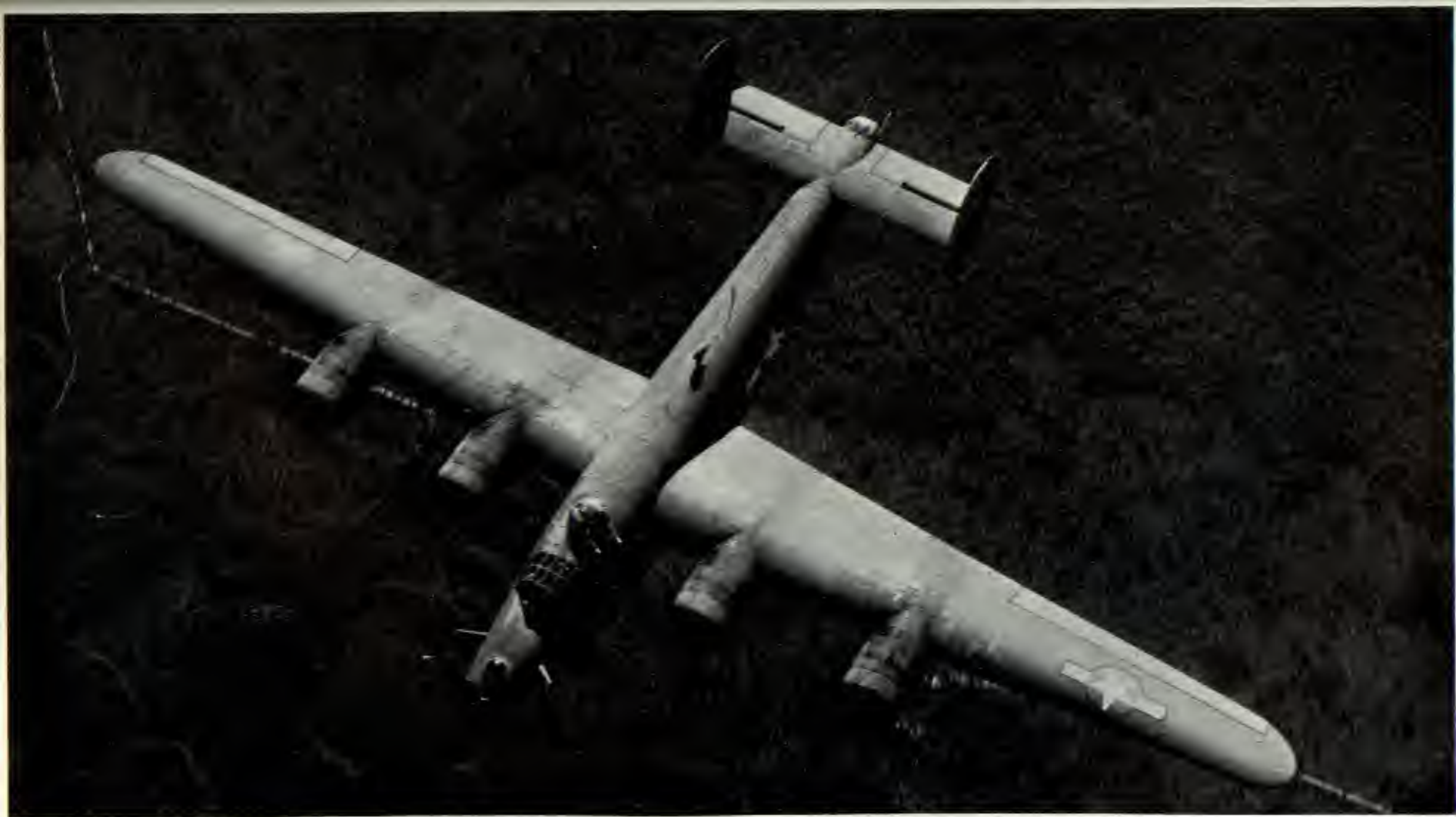
Fig. 3. The upper surfaces of the plane are RC-19, sandy brown, while the lower surfaces are azure blue (a mixture of RC-20, light blue, RC-34, sky blue, and a little RC-3, red). The number "24" on the nose is white. The word "STRAWBERRY BITCH" are black within white. The insignia is black. The propeller hubs are RC-3 and RC-30, red.

Fig. 4. Olive drab and neutral gray is applied as in Fig. 1. Sortie markers on the nose and the lettering are RC-4 and RC-30, yellow. The vertical stabilizer and upper wing surfaces are camouflaged with dark green (to which Japanese plane color RC-16 is applied). The insignia is light blue. The propeller hub is non-glare black.

(K. Hashimoto)

B-24Dデータ（B-24D　technical　data）全幅（span）33.5m，全長（length）20.2m，全高（height）5.5m，発動機（power　plant）P&W　R-1830-43（1,200HP）×４，全備重量（gross　weight）27,200kg，最大速度（max.speed）485km/hr，実用上昇限度（service ceiling）8,540m，航続距離（range）4,560km，武装（armament）12.7mm×７，爆弾（bomb）4,000kg，乗員（crew）10。

B-24の塗装に必要なレベル・カラー

①ホワイト	③レッド
④イエロー	⑧シルバー
⑫オリーブドラブ	⑬ニュートラルグレー
⑯濃緑色	⑲サンデイブラウン
⑳ライトブルー	㉚フラットベース
㉞スカイブルー	㉝黒つや消し

コンソリデーテッドB-24Dリベレーター爆撃機　太平洋戦線で使われたB-24Dの1機。上面オリーブドラブ，下面ニュートラルグレイの標準塗装で，各翼前縁の除氷装置（デ・アイサー）はつや消しの黒，国籍マークは赤のふちどりがしてある。

コンソリデーテッドB-24Dリベレーター

アメリカのライトパタソン空軍博物館の展示品となっているB-24D。1943年から44年にかけて、北アフリカの基地から作戦した第512爆撃中隊の装備機であったもの。機首にストローベリイ・ビッチの文字と美人の絵が画かれている。

①② P-36A. 1ST FLIGHT LEADER OF 94TH PURSUIT SQN., 1ST PURSUIT GROP.

③ P-36A. CMMAND AIRCRAFT 35TH PURSUIT GROUP.

④ P-36A. 55TH PURSUIT SQN.

①② P-36A，第1追撃大隊第94追撃中隊第1小隊の指揮官機

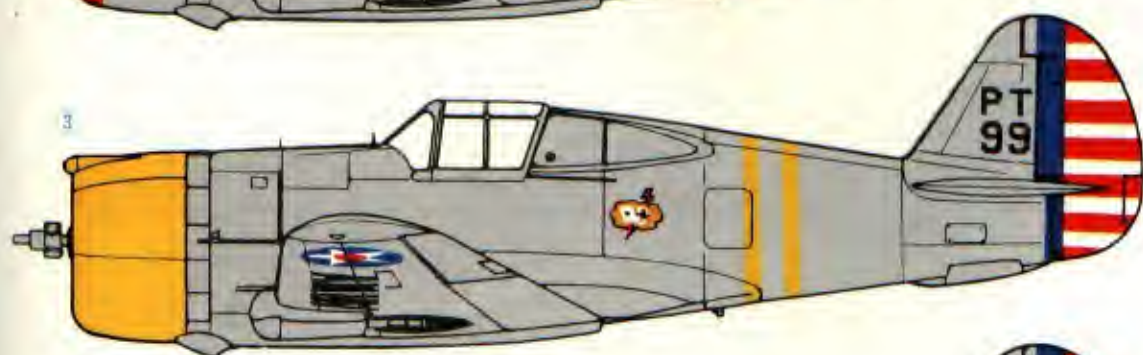
③ P-36A，第35追撃大隊司令官機

④ P-36A，第55追撃中隊所属機

1

2

3

4

© K.Hashimoto

カーチス　P-36A　ホーク

CURTISS P-36A HAWK

有名なカーチスP-40戦闘機の母体となったのが，これ（会社名カーチス75）で，カーチス社初の近代的戦闘機として英，仏，ノールウェー，オランダ，中国など数多くの国に輸出され，輸出型の75シリーズの各型およびP-36シリーズの各型が生産され，P-40の原型へと発展していった。日本軍のハワイ攻撃のとき米陸軍のP-36A 4機が，日本機を2機撃破，フランス空軍のホーク75A-1はBf109E 2機を撃墜するという記録をもっている第2次大戦初期の有名機のひとつである。

☆キット紹介☆

数少ないA-36のモデルであるが，レベルの1/72シリーズからP-36Aのキットが発売中で，しかも傑作ともいえるシャープで詳細なモールドのキット。ミニ・キットながらエンジン・カウリングが着脱式になっていて，ちゃんと実感のあるエンジンを内蔵しているのもオミゴトである。キットのデカールはフインランドのマーク付となっている。

☆塗装について☆

このキットの塗装のバリエーションを楽しむために，米陸軍機の塗装をカラーでご紹介すると，図①と②の機体は全面シルバー⑧の塗装，機首と胴体のの帯がレッド③＋㉚で，機首の光線反射よけはアンチ・グリア・グリーン（濃緑色⑯を代用），図⑤のようなエンブレムが記入されている。

図③　この機体もやはり全面シルバーで，カウリングと胴体の帯はイエロー④＋㉚レッド③少量混色のクロームイエロー，⑥図のようなマークが胴体にある

図④　機体は全面シルバーで，カウリングと胴体の帯がブルー（国籍マークと同色のブルー），エンブレムはイエローとブルーの円形にXの棒は黒。なお主翼下面には全機とも右翼にU.S.左翼にARMYの黒い文字があり，図①－②の機体はARMYの下に小さくPA91の文字が黒で記入され，左主翼上面の中央にも小さくPA91の文字が黒で記入されている。

（K.Hashimoto）

This is the forbear of the Curtiss P-40, a popular aircraft during World War II. As a modern fighter produced for the first time by Curtiss (referred to as the Curtiss 75 by the company), this aircraft was exported to many countries including Britain, France, Norway, Holland and China. Various models were produced in the Curtiss 75 series (produced exclusively for export purposes) and in the P-36 series. Finally the P-40 was produced on the basis of the P-36.

It is known that four P-36As of the U.S. Army shot down two Japanese airplanes during the attack on Pearl Harbor, and that the Hawk 75A-1 of the French Air Force shot down two Bf-109Es during WWII.

KIT :

A P-36 model kit, now on sale in Revell's 1/72 series, is valuable in that there are very few kits of this type available. Although it is small, this kit is one of Revell,s masterpieces. To say nothing of its elaborate engine design, the cowling is easily removed and replaced. The kit is furnished with Finland's insignia.

PAINTING :

For the benefit of model kit fans who enjoy color variations, several U.S. Army Hawks are shown in full color.

The planes in Figs. 1 and 2 are totally covered with Revell Color (RC) 8, silver. The stripes on the nose and fuselage are RC-3 and RC-30, red. The nose is anti-glare green, which can be simulated with RC-16, dark green. The emblem is the same as that in Fig. 5.

Fig. 3. This plane is also totally silver and the stripes on the engine cowling and fuselage are chrome-yellow, which can be made by mixing RC-4 and RC-30, yellow, and a little RC-3, red. The insignia is the same as in Fig. 6.

Fig. 4. Again the plane is entirely silver. The stripes on the engine cowling and fuselage are blue (as is the insignia). The circle around the insignia is yellow and blue and the "X" inside is black. On the lower wing surfaces are "U.S." on the right and "Army" on the left in black. This "U.S." and "ARMY" are common to all aircraft in Figs. 1 through 6, except for the planes in Figs. 1 and 2, which have a small "PA91" below "ARMY" in black and the same letters in the center of the upper left wing. (K. Hashimoto)

P-36Cデータ（P-36C technical data）全幅（span）11.38m，全長（length）8.7m，全高（height）2.8m，全備重量（gross weight）2,600kg，発動機（power plant）P&W R-1830-17ツイン・ワスプ（twin wasp）1,200HP×1，最大速度（max.speed）500km/hr，実用上昇限度（service ceiling）10,300m，航続距離（range）1,320km，武装（armament）7.7mm×3，12.7mm×1，乗員（crew）1。

P-36Aの組立に必要なレベル・カラー

①ホワイト	③レッド
④イエロー	⑤ブルー
⑧シルバー	⑯濃緑色
㉑黒つや消し	㉚フラットベース

カーチスP-36Aホーク戦闘機　カラー写真と同じく第27追撃中隊の所属機で，1939年の演習で用いたデザートサンドとスピナチグリーンの迷彩で飛行中のもの。胴体にはコンドルの部隊マークを付けている。先頭が現在空軍博物館に展示されている機体である。

第29回　パリ航空ショー開かる

REPORT FROM 29TH PARIS INTERNATIONAL AIR AND SPACE SHOW

（本文記事参照）

〔前ページ〕会場の地上展示機。Ｔｕ-154、Ｉℓ-62、超音速旅客機Ｔｕ-144や新型のコンパウンド巨人ヘリMi-12などのソ連勢に混って、右端にはバイザーの機首を上げた巨人輸送機ロッキードＣ-5A、右手後方にはＨＳニムロッドなどが、国際色豊かに並んでいる。

去る5月27日から6月6日まで、ル・ブールジェ空港で開かれた第29回パリ航空ショーの第一報。これはその展示機の一部である。

〔左ページ上〕早くから参加が予想されたソ連の超音速旅客機Tu-144を迎えうつために、英仏共同のコンコルドは、完成しているフランスとイギリス製の原型2機が出場した。写真はフランス製の1
01号機で、見物客のために機内を開放。飛行ショーはもっぱら1302号機が引き受けた。〔左ページ下〕イタリアのアエルマッキMB.326K。K型は複座練習攻撃機MB.326の新型で、単座にして、機首に30mm機関砲2門を装備した武装強化型。後方にHSニムロッドの尾部が見える。〔下〕エンジンを両翼の先端に並列式に装備した異様なかたちのコンパウンド巨人ヘリコプタMi-12。同機は開会式の会場に突如飛来して観衆を驚かしたという。後方は米海軍のP-3Bオライオン。〔上〕推進用のダクテド・ファンを付けたオートジャイロ。フランスでは、こうした機体の研究も、いまなかなか盛んである。

〔上〕昨年５月に完成して以来、テスト飛行がつづけられているイタリア空軍用の新型輸送機フイアットＧ.222。その翼下の機体はイスパノＡ-220攻撃機。〔下〕手前の機体は上と同じイスパノＨＡ-220攻撃機。ＨＡ-200複座練習機を単座にして、主翼下に四つ、胴体下に二つの兵装吊り下げ装置を付けたもので、スペイン空軍から25機が発注されている。会場にはその搭載武器も一緒に展示されている。ＨＡ-220の後方はフォッカーＦ28フェローシップ、その左に見えるのは、スペイン空軍用の新鋭小型輸送機ＣＡＳＡ　Ｃ.212エビオカーの尾部。〔右ページ上〕ユーゴから参加したソコ・ヤストレブ攻撃機。右側に垂直尾翼が見える複座の練習／攻撃機ガレブＧ-3とともに出場。〔中〕スウェーデンの新型軽飛行機サーブＭＦＩ-15。写真の機体は前輪式のＭＦＩ-15Ａで、このほかに雪上や不整地での離着陸のために尾輪式にしたＢ型も造られている。後方はＡ-300Ｂエア・バス。〔下〕会場には２次大戦機のホーカー・ハリケーンも展示されて、オールド・ファンを楽しませた。この機体は"ザ・ラスト・オブ・ザ・メニイ"（最後の１機）のニックネームで有名なバトル・オブ・ブリテン生き残りのハリケーンIIＣ。

937
UNION SYNDICALE DES INDUSTRIE
SAAB
MFI 15
SE-XCB

米三軍記念日の展示機

今年の米三軍記念日の記念行事は、在日米空軍部隊の大幅な移動で近年になく低調。一般公開された航空基地は、厚木と岩国の両海兵隊基地のみで、地上展示機もおなじみのものばかり。それでも公開日の5月15、16日は好天に恵まれ、両基地とも航空機ファンや家族連れの観客が大勢ゲートをくぐった。

岩国と厚木両基地の地上展示機のなかから、主なものをご紹介することにしよう。このページと次ページは、16日に公開された岩国基地の展示機。

〔上〕シルバー・イーグ
マークを付けた第115 海
闘飛行隊(VMFA-115)の
-4B。この機体は第15海兵
大隊(MAG-15)の指揮
である。〔中〕第1海兵
偵察飛行隊(VMCJ-1)
RF-4B。本誌5月号で
のように、両飛行隊とも
岩国に駐留している部隊。

〔左〕三軍記念日の会場
来したノースアメリカンT
39 セイバーライナー。

右ページ上は第 211海
撃飛行隊(VMA-211)のA
Eで、第12海兵飛行大隊
AG-12)の指揮官機。な
MA-211は、最近岩国を
けて、アメリカ本国に帰
ている。

〔上・下〕これも三軍記念日当日、岩国基地に飛来したF-4B。空母ミッドウエーに配属されている第161戦闘飛行隊の所属機。〔右〕地上展示のF-4Bの操縦席。

このページは5月15、16日に公開された厚木基地の展示機。〔上〕A-4Eスカイホーク。〔左〕CH-53Dシースタリオン　ヘリコプタでこれは海兵第462重ヘリコプタ飛行隊(HMH-462)の所属機。〔下〕F-4JファントムII。

〔下〕CH-46Aヘリコプタ。このほか航空自衛隊のF-104J、F-86Fや海上自衛隊のP-2J、HSS-2なども展示された。

USS タイコンデロガの搭載機

5月末、横須賀に寄港した米対潜空母CVS-14タイコンデロガの搭載機。同艦に積まれて来日したのはS-2Eの3飛行隊とSH-3Dヘリの2飛行隊、それにE-1Bの1分遣隊。今回はその部隊マークを中心にご紹介することにしよう。

【上・左上】第37対潜飛行隊（VS-37）のS-2Eトラッカー対潜機と尾翼の部隊マーク。マークは潜水艦をつかまえようとする手を図案化したもの。

【左下・右・下】第33対潜飛行隊（VS-33）のS-2E。右はその部隊マークで、スクリューバードとよぶ。左下は操縦席後下方の側面に画かれている第33対潜飛行隊のエンブレム"ハラキリらいおん"。

タイコンデロガは2次大戦中に建造されたエセックス級の空母(基準排水量33,100トン)
大戦末期に参戦の経歴を持つ"老兵"である。戦後はアングル・デッキをつけて、1957年
に攻撃空母として太平洋艦隊に復帰、ベトナム戦の援護に出動している。1昨年秋から対
潜空母となり、現在は第3対潜空母部隊の旗艦。第53及び第59対潜空母航空群（CVSG
-53、-59）に背を背して、東南アジア方面で作戦中であったもの。

今回来日した艦上の航空部隊は、S-2Eを装備した第33、37、38対潜飛行隊、SH-3Dヘリコプタを装備した第4、8対潜ヘリコプタ飛行隊とE-1B装備の第4分遣隊である。

〔上〕第111艦載早期警戒飛行隊（VAW-111）第4分遣隊のE-1Bトレーサー。〔左・右・下〕第38対潜飛行隊のS-2Eと尾翼のマーク。同飛行隊の1機のみがラダーに写真左のようなマークを付けている。部隊マークは写真右の垂直尾翼左面先端に付けられたかに。

〔上〕第4対潜ヘリコプタ飛行隊のSH-3Dシーキング　ヘリコプタ。

〔左上・上〕第8対潜ヘリコプタ飛行隊（HS-8）のSH-3Dヘリの機首に画かれた“8”の数字入りの部隊マークとチキン（鶏のひな）のマーク。505の0の数字のなかにもユーモラスに画かれている。

〔上・右〕第4ヘリコプタ対潜飛行隊（HS-4）のSH-3Dヘリと機首のマーク。部隊マークはごらんのようなブラック・ナイト（黒い騎士）。この機体はHS-4の隊長機でこれまでアポロ宇宙船8、10、11、12、13号の司令船回収にも出動しており、機首にはそのマークも付けている。SとEは、安全運航表彰と戦功賞を示すもので、下の1本のバーは、戦功賞2回受賞を意味している。

フォト ニュース

ドック型揚陸輸送艦LPD-11コロナドで離着艦テスト中のAV-8A。米海兵隊のVTOL攻撃機AV-8Aは、この1月に最初の1機が引渡され、メリーランド州パトクサント・リバーの飛行テスト・センターで飛行テストをつづけていたが、このほどLPD-11や強襲揚陸艦LPH-7ガダルカナルを使っての離着艦テストを終え、サウスカロライナ州のビューフォート海兵隊基地に移されることになった。同機につづいて3機もまもなく同基地に配備される。AV-8Aは当初50機が購入されることになっており、1974年度までに、3個飛行隊と1個訓練飛行隊が編成される。ハリアーの最初の部隊はVMA-513の予定。(下)洋上哨戒に活躍しているソ連海軍航空隊のTu-16バッジャー。4月2日の撮影だが、飛行場や後方の山は冬景色である。

(上)C-5Aギャラクシーから運び出される戦車、トラック、ジープの長い戦団。これは陸軍と空軍がこのほどテキサス州のフォートフッドで行なった共同演習の模様で、緊急時に陸軍の機械化部隊をいかにすばやく展開できるかを試したもの。機械化部隊の装備は総重量1,683トンにものぼるが、C-5Aへの積み降しに要した時間は、約30時間であったという。

(右)同じくC-5Aに積み込まれるCH-47ヘリ。C-5Aはこの4月に、同ヘリ3機を積んで、アメリカから南ベトナムまで、給油時間を入れて28時間で飛んでいる。

(下)パームデールのロッキード飛行テスト・センターで翼を休めるL-1011トライスターのトリオ。手前から1、2、3号機。イースタン航空向けの3号機は5月中に飛行テストに入る予定。

[上]ソ連のSST　Tu-144は今回のパリ航空
でコンコルドと会場の人気を二分したかたちであ
これは同機の最終組立工場風景。生産計画がどのよ
なっているのか不明だが，飛行テスト中の機体につ
後続機の製作が，このようにどんどん進められて
をみると，同機の将来には自信をもっているよう
[左]グラマン・エアロスペースとボーイングが
開発を進めているスペース・シャトル（宇宙バス）
成予想図。ごらんのように宇宙飛行をするオービ
ブースターにおぶさったかたちになっており，打
後61,000mの高空でブースターは背面のオービタ
り離して地上に帰還する。両方にそれぞれ乗組員
されており，100回の打ち上げに耐えられるように
れているという。
[下]ボーイング747の上部客室は，エアライン
に応じてスペースを広げて，窓数もふやせるよう
た。写真上は現在のもので，下が広くなった上部

[下]上陸作戦や海岸での作戦行動で重量物資の空輸に使われるHLH（重輸送ヘリコプタ）の開発の第1段階は，ボーイング・バートルが担当することにこのほど決った。この開発は主として陸軍が当り，海軍が支援することになっているが，総額7,600万ドルの巨大な計画である。写真はバートルHLHの完成予想図。

〔上・左〕横田基地に残っていた最後のF-4Cファントムが、去る5月13日同基地を離陸、沖縄に移駐した。この日横田を飛び立ったのは第347戦術戦闘連隊第80飛行隊の7機で、嘉手納基地の第18戦術戦闘連隊への編入が決っているもの。写真は横田を離れるF-4C。

〔下〕5月末から6月初めにかけて日本海中西部の海域で行なわれた海上自衛隊と米海軍の合同演習から。写真は津軽海峡西方で、給油訓練のためタイコンデロガに接近併航中の護衛艦"しきなみ"。

スナップ だより

【上】5月中旬、横田基地に飛来した第212海兵戦闘攻撃飛行隊（VMFA-212）のF-4Jファントム。同飛行隊の所属機が横田基地に飛来したのは、初めてである（入間市・重岡輝夫）。

【左上】これも最近横田基地に姿を見せた珍客で、米空軍通信軍団（AFCS）所属のVC-140Aジェットスター（国立市・渡辺不二夫）。

【左下】羽田の東京国際空港に飛来したサウジアラビア空軍のC-130Eハーキュリーズ。5月20日の撮影（東京都・横尾清孝）。

【下】5月に佐世保に寄港した米空母キティホークの搭載機。艦上に見えるのは第52攻撃飛行隊（VA-52）所属のA-6Aイントルーダー。垂直尾翼に黒い鷲のマークを画いている（福岡市・織田信雄）。

メッサーシュミット
Bf 109E

バトル・オブ・ブリテンの花形戦闘機

メッサーシュミットBf109戦闘機のうち、今回は大戦の緒戦の頃にデビュー、バトル・オブ・ブリテンでドイツ空軍の主力戦闘機として活躍したEシリーズを特集することにしよう。〔前ページ〕編隊飛行中のBf 109E-4。後方の2機はルーマニア空軍機で、手前の1機は製油所防衛のために同国に駐留したドイツ空軍のJG77かI／JG4の所属機と思われる。

Bf109E-3はDB601Aaエンジン（1100HP）を搭載、機首のMG17（7,9mm）機銃2挺と主翼のMG FF（20mm）機関砲2門のほかさらにエンジンの上にMG-FF 1門を追加装備した武装強化型。E-4はこの追加の20mm機関砲をはずしたもので、E-4/Bは爆架を付けた戦闘爆撃型である。このページ3枚はすべてBf 109E-3で、〔上〕は第57戦闘大隊第7中隊（7/JG57）の所属機、〔下〕は第54戦闘大隊第2中隊（II/JG54）の所属機である。

右ページは〔上〕パトロールに出動のためにライフ・ジャケットを着用中の第27戦闘大隊（JG27）のシェルマン少佐。バックは愛機のBf109E-3。〔中〕Bf109E-4で、これは第27戦闘大隊（JG27）の所属機。〔下〕第26戦闘大隊（JG26）のアドルフ・ガーランド司令官の乗機。白い楯に黒いS字を描いたマークは戦闘機部隊のなかでも有名であった。

〔上〕と〔中〕はBf 109E-4。上の機体は第77戦闘大隊第2中隊（II/JG77）の所属機で、風防の左下に黒い馬と波のマークが付けられているのが、かすかに見える。
〔下〕第27戦闘大隊（JG27）所属のBf 109E-4/B。E-4／BはE-1／Bと同じように、胴体下に50kg爆弾4発か250kg爆弾1発を付けられるようにした戦闘爆撃型。爆撃機の消耗が激しいためにとられた措置であるが、パイロットには評判が悪く、身を軽くするために出来るだけ早く爆弾を投下しようとしたために、期待されたほどの効果はあがらなかった。写真の機体は整備中のもので、手前に250kg爆弾が1発置かれている。

世界速度記録をねらった　“研三”高速研究機

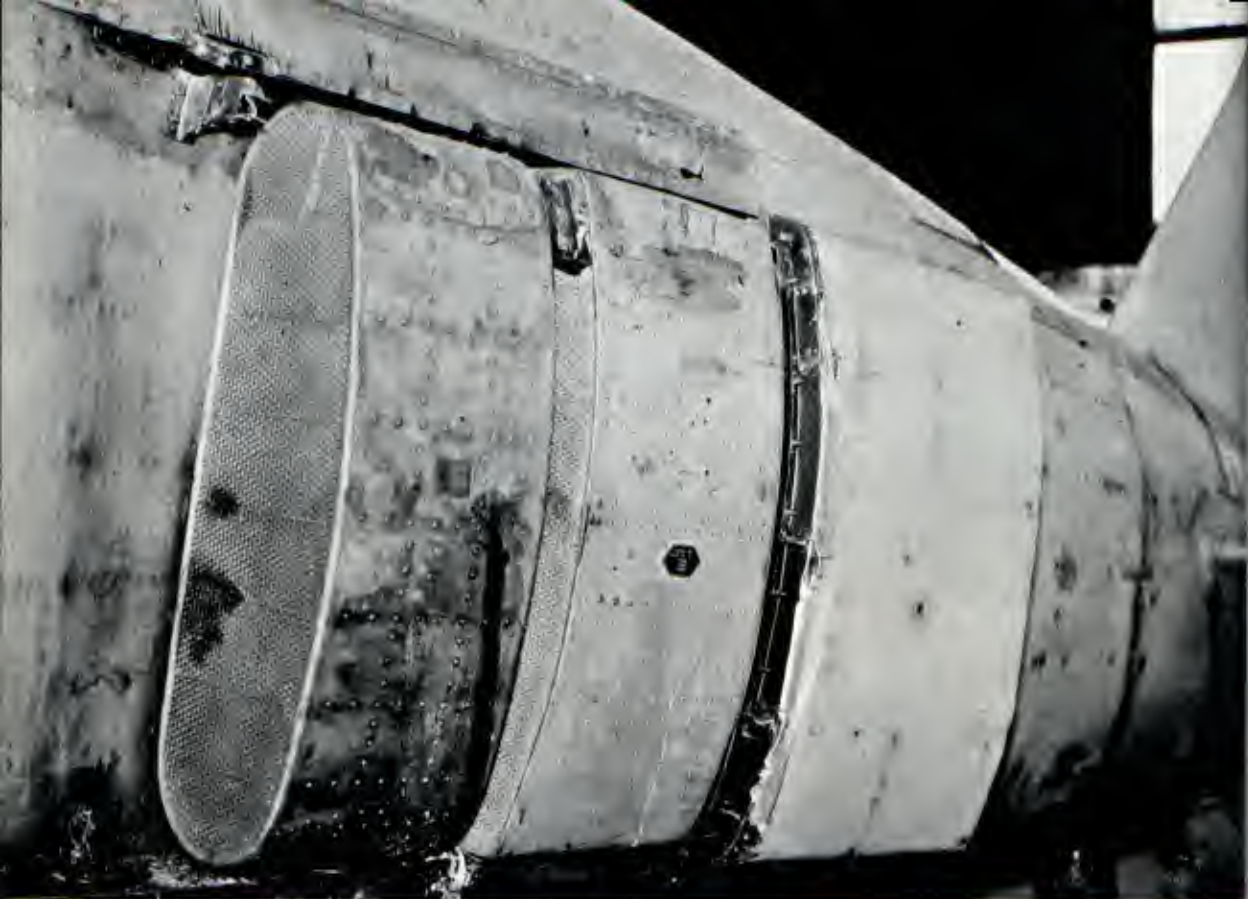
THE “KEN-3” HIGH-SPEED RESEARCH-PLANE (KI-78)

"研三"（キ-78）は、陸軍の依頼で東京帝大航空研究所が開発、川崎航空機で製作された高速研究機。昭和17年に1機が完成、19年1月までに32回のテスト飛行が行なわれているが、その間高度3,527 mで時速699.9kmと700km近い水平速度を記録している。ただ1機の試作に終ったが、戦前の日本が造った最高速のレシプロ機であった。

ここの写真は、戦後進駐した米軍が川崎航空岐阜工場で撮影したもの。米軍の手に渡った後の同機の消息は不明である。しかし、写真でもわかるように、操縦席内の計器などもはずされてもはや飛べる状態ではなく、胴体に"アメリカへ輸送の

（本文記事参照）

ため保存〟と英語で書かれているが、本国に持ち帰った記録はないので、このまま壊されてしまったものと思われる。

〝研三〟はごらんのように、直径が小さくて強力な液冷のDB 601 Aエンジンを装備してしぼりにしぼったいかにも高速機らしいスピード感にあふれた外形。主翼が小さいのが目立つが、翼面荷重は220 kg/m²（鍾馗2型は184.3、雷電3型は192 kg/m²）と、前代未聞の大きな値であった。着陸を容易にするために車輪間隔も大きくとってあった。胴体の側面に張り出してあるのは冷却器である。

“研三”の冷却器は、空気抵抗を減少させるために、胴体に半埋込式に取りつけられた。冷却器覆いは胴体から5cmほど張り出して吸気口となり、蜂の巣型の冷却器を通った空気は、覆いの後部のフラップで調節されてふたたび胴体の表面にぬけるようになっていた。写真上は覆いをとってむき出しの蜂の巣型冷却器、下の写真ではフラップもはずされている。

未発表海軍機写真集

A6M3 ZERO FIGHTER

D4Y2 SUISEI DIVE BOMBER

〔左〕零戦32型。翼端を切ってますます軽快で精かんな"風貌"となった32型は、大戦前半の海軍艦戦のスターだった。写真の機体は第1航戦所属機と思われる。

〔下〕艦爆彗星12型。同機のデビュー当時のスナップで、どのようにして手に入れたのか、米軍の日本機識別便覧にもこの写真が載せられている。701空の所属機。

A5M2a TYPE 96 CARRIER FIGHTER

中国戦線の96式2号艦上戦闘機1型。第12航空隊の所属機。全面銀地に尾部を赤塗りの塗装。この角度からの両機の写真は珍らしい。下の写真も同一の機体で、胴体下にふくらんで見えるのは増槽。特徴のある例の大きな主脚カバーははずしてある。

N1K1 KYOFU FIGHTER SEAPLANE

出現の時期が遅く、所期の戦果はあげられなかったが、世界最高の性能を持っていた日本の水上戦闘機強風。川西航空機で97機が造られた。写真は戦後、佐世保基地のハンガーにて。後方に2式練習飛行艇が見える。

SEVERSKY 2PA-B3 FIGHTER

海軍が96式艦戦の不足を補うためにアメリカから購入したセバスキー2 PA-B 3。約20機ほど輸入したが、性能比較テストの結果、固定脚の96式艦戦よりも劣っていたために、一部を中国戦線で陸上偵察機として使ったにすぎなかった。写真の機体はその1機で、こうした同機の日の丸を付けた鮮明な写真は珍らしい。

鹵獲された日本の軍用機 《その14》

CAPTURED JAPANESE MILITARY AIRCRAFT DURING WW II

前ページ写真；大和海軍基地で連合軍に接収された零戦52型。すべてプロペラをはずされて，復列ともに，かなりの数が整列させられている。奈良県山辺郡の大和海軍基地は昭和20年2月に練習部隊の基地として発足したが，5月から大和空は第3航空艦隊第13航空戦隊に編入され [illegible] 終戦約2カ月後の1945年10月12日の撮影。

後方には焼却された残骸がころがっている。45年9月15日の撮影。下の写真は無傷の1式陸攻22型のラインアップ。おそらく接収のために，近辺からこの基地に集結させられたものであろう。操縦席やエンジンにシートをかぶせて大事に扱われているが，その後の消息は不明である。ほとんどが焼却されたものと思われる。45年9月12日の撮影。

〔上〕沖縄の飛行場で待機中を攻撃された96陸攻。機体に無数の弾痕が見える。攻撃したのはアメリカの第10歩兵師団。左側後方には、やはり銃撃を受けてスクラップ寸前の陸軍の飛燕1型が見える。この96陸攻は、尾翼の記号から第901航空隊の所属機と思われる。1945年6月13日の撮影で、この日、沖縄の日本海軍部隊は玉砕している。〔左〕爆撃を受けて骨組みだけとなった那覇海軍航空基地のハンガー。焼けこげた天山艦攻がただ1機残っている。同機は木更津航空隊の所属機であったもの。1945年6月12日の撮影。〔下〕沖縄の嘉手納飛行場に並べられたおとり機。敵機の目をあざむいて、空からの攻撃を一手に引き受けるために作られたむしろの飛行機。1945年4月2日の撮影で、この前日、米軍は沖縄本島への上陸を開始した。

〔上〕終戦ま近かに損傷を負って飛行不能となった海軍機。進駐した米兵が点検中のスナップで、飛べないことがはっきりしているためか、各機ともプロペラはそのまま。中央の機体は脚が折れた雷電。後方は左から96陸攻、2式中練、銀河の3機。本州西部地方の基地で、終戦まもない頃の撮影。

〔右〕緑十字を付けた零式輸送機。大和基地で接収された1機で、降伏の予備交渉でマニラへ飛んだ日本の全権団を運ぶために整備されたもの。1945年10月12日の撮影。

（本文記事参照）

第29回パリ航空ショーに展示された ソ連の新鋭機

航空ショー開会式の会場に突如飛来して観衆を驚かしたMi-12（V-12）ヘリコプタ。胴体から張り出した両翼の端にエンジンを並列方式に付けたコンパウンド回転翼機。胴体は2階建てで、全高12.5m、貨物室の長さは28mという巨人機である。（写真上下）。

〔上〕Mi-12を正面から見る。直径35mという巨大なロータの下には2基ずつのガスタービン・エンジン（ソロビヨフD-25V・6,500shp）を付けた4発機。（TASS）

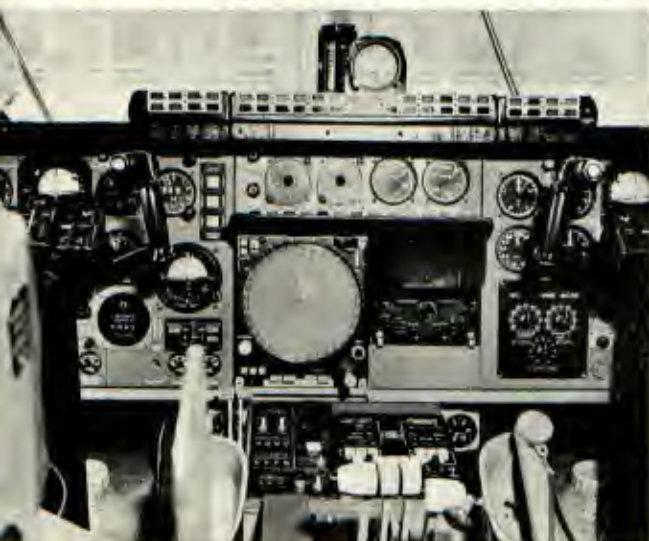
〔上〕後部の貨物ドアはごらんのような観音開き式。昨年8月、この中に40トン以上を乗せて2,000mへ上昇、FAIの世界記録をたてている。

〔上〕翼と車輪の支柱
ぶビームを何本もつけた
ルド・ファッションの形
これで時速200kmで飛ぶ。

〔上・右・下〕パリ航空ショーで初めて公開されたもう一つのソ連の新型機 I ℓ-76輸送機。ファン・エンジン4発で、西側で流行しているエア・バスにあやかった（?）ワイド・ボデイ（太胴）の輸送機。なんとなく機首がB 747ジャンボ・ジェット、観音開きの扉が付いた尾部は巨人輸送機C-5に似た感じの機体である。

これまでのソ連の輸送機は、軍用機との互換性を考えた機体が多かったが、この I ℓ-76などは初めから民間輸送機として本腰を入れて開発された機体のようで、今後の成長が楽しみである。（TASS）

〔左3枚〕前ページ
じく新型のIℓ-76輸送
APNが伝えるところ
ると同機は去る3月25
初飛行したばかりとい
ら、まったくの新型機
けで、これも新型のス
トリバーサ付きのファ
エンジン装備。最大離
量は150トン以上とい
ら、西側のエアバスよ
やや小型である
写真でははっきりし
が、離着陸距離を短縮
ための高揚力装置もそ
ているという。特に同
特徴としているのは、
の写真でもおわかりの
に、主脚の収納部は、
下した後に、地上の小
どが飛び込むのを防ぐ
に密閉されること。初
ら未舗装の滑走路での
にも重点をおいている
お国柄というところで
う。　　　　（TASS

〔右〕パリ航空ショーへ出場のためにル・ブールジェ空港に到着
したTu-144超音速旅客機。Tu-144は2年前に初飛行して以来、テ
スト飛行で国内各地や衛星諸国内を飛びまわっていたが、共産圏か
ら外に姿を現わしたのはこれが初めてである。〔上〕はコンコルド。

〔上〕Tu-144の操縦席内計器板。〔下〕これもル・ブールジェ空
港に着陸したTu-144。同機はプラーグで給油ののち、一気にパリに
向ったが、途中では超音速での飛行はしなかったようである。以前
に発表された写真にくらべて、エンジンの空気吸入口がやや延ばさ
れていることがわかる。